

本学における防災・減災教育の取り組み（その6）

— 災害・緊急時の専門力・人間力の育成 —

布施 千草¹ 清宮 宏臣¹ 山田美知代¹ 根本 曜子¹
山口 温子² 時田 猛² 三野宮純一²

The Action of the Disaster Prevention Education in the Uekusa Gakuen Junior College (Part 6): For the Purpose of Enhancing the Expert Knowledge and Ability in the Event of a Natural Disaster

FUSE Chigusa SEIMIYA Hiroomi YAMADA Michiyo NEMOTO Yohko
YAMAGUCHI Atsuko TOKITA Takeshi SANNOMIYA Jun-ichi

本学では平成23年から繰り返される大災害にその都度被災地支援を行ってきた。その問題意識を踏まえ「産学協働による学生の社会的・職業的自立を促す教育開発」事業で「災害・緊急時の専門力・人間力の育成」をテーマに取り組んできた。平成27年度は千葉市との共同研究で拠点福祉避難所運営訓練を実施した。その後平成28年度に渡り2回の訓練を実施した。その中から教育的課題が生じた。学生の主体的な動き、要配慮者への対応が不十分であった。今年度はその教育プログラム開発にあたった。体験的に学ぶプログラムによって学生たちは要配慮者である障害のある方に対し、理解が深まった。一方で、避難所生活からその生活再建に向けて福祉職の関わりはどうあればよいか。長期的観点にそった要配慮者への支援を模索、拠点福祉避難所運営の全学的取り組みの必要性が浮かび上がった。

キーワード：拠点福祉避難所、要配慮者への対応、体験的学び

1. はじめに

本学は平成23年の東日本大震災以前の平成19年の新潟県中越地震以来、被災地の復興支援に取り組んできた。その中で災害弱者への対応の課題を踏まえ、文部科学省の「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」助成を得て、平成24年度から26年度まで、「産学協働による学生の社会的・職業的自立を促す教育開発」に取り組んだ。「災害・緊急時の専門力・人間力の育成」をテーマに、地域介護福祉専攻に科目「災害と緊急時の介護」を必修化し、被災地ボランティアを継続させ、災害・緊急時の専門力・人間力を育成するためのカリキュラムイメージの策定、授業等での避難所運営ゲーム（HUG）の導入などの取り組みを行ってきた。

また、平成26年度に千葉市より本学を災害時において「拠点福祉避難所」とする打診があった。平成27年度には千葉市との共同研究が進められ、拠点福祉避難所の運営訓練を中核として、本学の教職員・学生と千葉市担当課はもとより、地域住民等にも積極的に参加を呼びかけ、防災・減災に取り組んだ。2度にわたる運営訓練が行われた。その後、本年拠点福祉避難所の指定を受けた。一方で運営訓練の中で新たな教育的課題が浮かび上がった。まずは要配慮者である障害のある方との関わりがうまくできていたとは言えない。そして、訓練に臨む学生の主体性を引き出すことが十分ではなかった。やはり日頃から要配慮者への関わりについての学習環境を整え、その専門性を高める必要性を痛感した。そ

1 植草学園短期大学

2 植草学園総務課

こで平成29年度は福祉避難所運営訓練に代わり、障害のある方の理解・支援を体験的に学ぶ教育内容を取り入れた。

2. 倫理的配慮

植草学園短期大学研究倫理基準に則り、実施した。

3. 本学学内共同研究の概要

学生の体験的な学びを中心とした共同研究であるが、災害時に向けて、普段から地域特性を理解した取り組みが必要である事は言うまでもない。学生への取り組みの前に5月21日曜日に船橋市介護支援専門員協議会の研修依頼を受けて、船橋市介護支援専門員協議会研修委員と共にテーマを「災害に向けてのケアマネジメントの在り方～大きな災害が起きる前に私たちがしておくこと、できること～」として研修計画を作成した。

下記のスケジュールで研修会を実施した。

時間	プログラム
13:15-13:20 5分	開会挨拶・今後の流れ
13:20-13:50 30分	講義Ⅰ 船橋市危機管理課
13:50-15:00 70分	講義Ⅱ 鈴木あき子氏
15:00-15:10 10分	休憩・席替え
15:10-15:15 5分	グループワーク説明
15:15-16:00 45分	班ごとにKJ法で課題を出し合う
16:00-16:20 20分	各班からの発表
16:20-16:30 10分	質疑・まとめ・総評
16:30	閉会

参加者92名、40代から60代の女性が多かった。7割の基礎職種は介護福祉士であったり、7年から10年以上のキャリアをもつ介護支援専門員の参加が7割であった。

船橋市は地域特性と被害予想がいくつかに分類されることもあり、一般的な研修内容では対応できないと思った。そのためまずは、講義Ⅰで船橋の行政機関の考えを知ること。また講義Ⅱで介護支援専門員として、実際に活動した人の話を聞くこと。さらなるイメージを高め、自分の地域の災害時の対応を想像してもらうために、グループワークを取り入れた。

自由記載のアンケートにより、参加者の多くに災害への関心に高まりがみられた、更なる学習への意欲的な言葉が聞かれた。

後日、鈴木氏の逐語録を配布し、各地域の研修会の活用を勧めた。

「地域別防災カルテなど知らない情報もえられたので良かったです。知らないことがたくさんあった。」

心から尊敬できる行動をしていることを伺い、福祉って素晴らしいと改めて思ったこと、この話を大事に災害が起こったときに備えようと思いました。自分の家庭と仕事の兼ね合いがとても大変だと思った。自助・互助・公助の役割と連携の重要性を切に感じました。

自分も含め、地域で要援護者も多くいるので何かあってからではなく、事前の準備などの啓発の必要性を感じた。また、緊急連絡先も1、2カ所とりあえず確認し、安心するのではなく、遠方の方の連絡先の確認の必要性を痛感できた。生の声は心に響きました。」

3-1 ワークホームの避難訓練

ワークホームとは、千葉市独自の事業の1つで、在宅で生活している障害のある方々が、軽作業を通じて自立への意欲や社会参加を目指していくことを目的としている（詳細については、本稿3-4を参照されたい）。

1) ワークホームの避難訓練への参加経緯、事前準備

昨年度実施した拠点福祉避難所運営訓練における課題の1つとして、障害のある方とのかかわり方や障害のある方への必要な支援の視点が十分でないことが浮き上がった。

そこで、まずは机上の学びだけではなく、実際に障害のある方と実際に関わる機会をより多く設けることが必要であろうと考え、地域資源や教員の知合いなど、これまでに培ったつながりなどを通じて、あるワークホームにおける避難訓練についての情報を得た。この避難訓練への学生参加を打診し、参加の快諾を得ることに至った。

事前の準備については、日時や当日の内容などを、ワークホームの担当者と電話やメール等で数回

の確認を行った。また、今回初めてのことであるため、これまでの打ち合わせ内容の確認を含め、避難訓練を実施する場所を1度訪れ、ワークホーム周辺の環境や避難経路などについての確認を行った。

避難訓練の内容^{注1)}については、例年ワークホームで実施している内容を前提としながら、学生の参加の仕方についての確認をした。概要は以下の通りである。

(1) 参加団体および参加者数

ワークホームは、①デフ、②協働舎、③ほほえみいながの計3団体が参加。参加予定者数は、各団体で10名程度を予定。ただし、当日の障害のある方の状況によって参加者数が少なくなる可能性がある旨話があった。また、近隣の消防署や消防団、地域自治会、民生委員なども参加予定である。

(2) 障害の状況

①デフ；主に聴覚障害の方、②協働舎；知的障害、精神障害、視覚障害、聴覚障害の方、③ほほえみいなが；知的障害、精神障害者、身体（内部障害含む）障害の方など。」

(3) 内容

3団体合同による①避難訓練、②起震車体験、③けむりハウス体験、④水消火訓練を実施。なお、雨天の場合について、上記①については小雨程度あれば原則決行し、上記②～④の体験については、機械の都合上、中止とする。中止となった場合に備えて、三角巾や包帯を用いた応急処置の方法を体験する。

学生の参加の方法について、上記②～④の体験について、各体験場所に障害のある方を誘導しながら一緒に体験をする、上記①の避難訓練については、各学生がワークホーム周辺に住んでいる住民という仮定のもと、建物から出て来た障害のある方と一緒に安全な場所まで避難誘導する^{注2)}、という想定で参加することを申し合わせた。

(4) 学生へのオリエンテーション、必要な知識や技術の事前確認

今回参加予定の学生は2年次生と専攻科生^{注3)}であり、昨年度拠点の福祉避難所運営訓練（以下、運営訓練）を体験している学生である。しかし、運営訓練時に担当役割の関係で、障害のある方と直接かわっていない学生もいる。そのため、今回の避難

訓練の目的や内容についてのオリエンテーションと併せて、障害のある方と接するうえで、最低限必要と思われる知識や支援技術について再確認を行った。

1つは、聴覚障害のある方とのかかわりとして、簡単な手話（あいさつ、非常時に役立つ言葉、指文字など）の確認をした。また、手話ができない場合でも、空書（手のひらに指先で字を書く、空間に文字を書く）、筆記用具やスマートフォンのメモ帳機能の活用といった、コミュニケーションをとる方法についての確認を行った。

もう1つは、視覚に障害のある方とのかかわりとして、移動支援の方法を確認した。基本姿勢や階段や隘路での支援方法、目の見えない方に伝わる的確な口語表現（丁寧かつ簡潔な状況説明、先天性あるいは中途の障害であるのかによる違いなど）の確認をした。

2) 当日の様子

(1) 日時

6 / 27 (火) 10:00～12:00 (9:30集合)

(2) 天候；曇り。

(3) 参加団体や参加者数^{注4)}

- ・ワークホーム3団体；20名程
 - ・消防署5名程、消防団7名程
 - ・民生委員4名程、自治体職員1名程
 - ・防災会社関連2名程
 - ・本学学生28名、教職員4名
- (計70～80名程度)

(4) 避難訓練の内容と様子

当日は、前日から降り続いていた雨が朝方まで少し残る天候であったが、幸いにも雨は止み、当初の予定通り実施した。

当日は、訓練が開始する前までの空き時間を使って、学生全員で各ワークホームの場所や周辺状況、避難ルートを歩いて確認した。その後、学生は、事前に振り分けていた3つのグループに分かれて、担当の各ワークホームの場所まで移動、各ワークホームの外で待機をしていた。

地震発生予定時刻で避難訓練が始まり、各ワークホーム内の指導員の指示のもと、屋外への避難誘導が始まった。ワークホーム内からの避難誘導について、一部打ち合わせ通りとならなかったところも

あったが、各ワークホームの利用者が屋外に避難してきたところで、本学学生と合流し、人員確認等を実施した。

その後、「協働舎」と「ほほえみいなげ」の2つのワークホーム利用者と学生は、「デフ」の利用者と学生が来るのを屋外で待ち、「デフ」の利用者と学生は、周辺状況を確認しながら街中を歩き一緒に避難行動をとった。

学生は、聴覚障害のある方と身振り手振りでコミュニケーションをとりながら、避難誘導し、上記2つのワークホームに到着、合流したところで3つのワークホームが小グループを形成しながら、目的地の場所まで避難をした。

目的地に到着後、人員確認等を行ったのち、起震車やけむりハウス体験等を利用者と学生と一緒に体験をした。



写真1 避難途中にて人員確認をしている様子

3) 避難訓練における学生の学び（学生の感想レポートと当日の参加の様子から）

避難訓練に参加した学生（28名）は、「おおいに勉強になった」（21名）、「勉強になった」（7名）、「あまり勉強にならなかった」（0名）との感想を持った。

また、学生には、以下の内容のレポート作成をしてもらった。

（1）地域で暮らす障害のある方の避難誘導、必要な支援について

- ・「周囲に段差がないか、車や自転車はこないか、常に気を配る必要がある。車いすを利用している

方には、階段の昇降の支援が必要」

- ・「聴覚障害のある方の場合、道路を歩いている時に後ろから車が来たことがわからないため、声掛けをする必要がある」
- ・「読話で話せる人もいるが、多くの人が手話で話をしているため、手話ができる人がいると安心できるのではないかと思った」
- ・「実際に災害にあったら慌ててしまうかもしれませんが、慌てずに落ち着いて避難誘導することが大切。ガラスや電柱、落下してくるものや倒れてくる物に十分注意しながら避難する」
- ・「てんかんがある人がいました。内部障害のため、先方の方より伺わないとわかりませんでした。椅子を常に持ち歩いて、立ちっ放しにならないように促しました」など。

（2）今後必要な知識や技術、事前準備について

- ・「手話がわからない時のために、紙とペンが必要」
- ・「椅子も必要だと感じた」
- ・「手話を覚える」
- ・「避難経路を確認する（複数のルートがあると良いと思う）」
- ・「筆談できるように書けるようなものを準備しておく（携帯も活用する）」
- ・「声を出せず、助けを呼ぶことができない人もいるため、ホイッスルなどを持っておく」
- ・「近隣の住民に伝えておく」
- ・「自分がいる地域の環境、逃げ道、建物の位置などを詳しく知り、何通りかの避難経路を考えておく」
- ・「教科書に載っていないような手話（簡単にわかるような工夫を凝らした手話）があることも知ることができ、当事者と関わることの重要性を感じた」
- ・「避難場所、避難経路、危険個所を把握する必要がある」など。

（3）訓練からの学び

- ・「避難所（某駐車場）へ行くだけの訓練だったが、実際の災害時は訓練で通った道が通れない場合や荷物を持っていたり、道路には瓦礫が散らかっていたりしているから、障害物を避ける作業が必要」

- ・「車椅子の利用者の人を、行きは4人がかりで階段を上り下りしたりした。しかし、帰りは、ゆるい坂道があると利用者が教えてくれ、少し遠回りになったがそちらの道にした。土地勘のない所での支援は大変であり、地域の人だけでなく利用者とも協力する必要があることを学んだ」
- ・「日頃から地域住民の方と密になって周辺に障害者施設があることを知ってもらえれば、何かあったときに、協力、支援を求めることもできると考えた」
- ・「私たちが今まで経験してきた避難訓練は、学校など、ベルが鳴って放送が入って、みんなで静かに避難するものでした。しかし、障害のある方ではそれをできない方がいること、誰かの助けなしでは難しいことが理解できました」
- ・「直接かかわりを持つことで、授業や教科書では学べない“生”の声が聞けて、気づかされるが多かった」など。

ワークホムの避難訓練に参加した学生は、2年生である。1年次における学びや介護実習を体験し、昨年度の運営訓練も体験しており、少なからず障害に対する理解や災害時の状況に対する理解はできている。しかし、今回の避難訓練を通して、新たな気づきや学びが得られたことの感想が多く見受けられた。

1つは、「聴覚障害のある方への配慮や支援」である。聴覚に障害がある方とのコミュニケーションがうまくいかない経験を通して、情報伝達不足による不安な気持ちや音が聞こえないことで生じる危険などをより現実的に理解することができているように思われる。手話というコミュニケーション方法の必要性や手話ができない場合の代替手段、適切に情報や状況を伝えることの必要性に関する気づきや感想が多く見受けられた。

もう1つは、「地域社会で生活している障害のある方の避難誘導」についてである。地域社会の中に、さまざまな障害のある方が生活しており、働いている。街中にあるワークホームでの避難訓練を実際に体験したことで、災害などのいざという時に、「地域とのつながり」や「その地域や場所の把握、土地勘」が必要であり、危険回避のための「避難経

路」の準備に関する感想が多く見受けられた。

今回の避難訓練では、参加できた障害のある方の人数と学生の人数との関係で、障害のある方一人に対して、学生が3～4人で対応行動する状況もあり、積極的に関わることができた学生とかかわることが十分にできなかった学生がいたことも事実である。しかし、障害のある方とのかかわりについては、人数の関係だけでなく、学生の性格や個性により、積極的に関わることができる学生とそうでない学生がいることも付しておきたい。

障害のある方とのかかわり体験、さらには地域社会における障害のある方の避難訓練の体験を通して、障害のある方に対する理解、災害時等における必要な配慮、知識や技術、災害時に向けた事前準備として必要なことや心構えなど、多くの気づきや学びがあったように思われる。

3-2 ことぶき大学校交流授業

(詳細は紀要19-1に記載)

この交流講座は、平成12年から行っている。開催目的は①高齢者福祉を学ぶ同志の世代間の交流、②異世代とのコミュニケーションをとれる人間関係力の育成である。

今年度のテーマは「緊急・災害時の災害時要配慮者に着目した情報伝達や安否確認、避難支援、訓練について考える」とした。本学学生29名、ことぶき大学校生68名が参加した。アドバイザーとして8名の全教員が関わった。約2時間の交流会であった。

障害のある方におこった災害の事例を通し、グループワークを行い支援方法の検討、それを踏まえた日頃の訓練方法の検討をKJ法でまとめて発表した。

学生のアンケートでは、

「異世代の方と交流することで物事に対し、新しい見方、考え方ができることに気づいた。成長したと思う。自治会や町内会など地域との関わりをどうすべきか、考えることができた。実体験や家族に要配慮者がいる人の支援方法などのお話が聞けた。話し合う中で、地域間、近所同士の協力があれば、いろいろ楽になることが改めて分かった。」と肯定的な意見が多かった。

反省点としてあげられたのは、

「事前の準備不足、交流時間が短かった。ことぶき大学校生をもっと知りたかった。ことぶき大学校生に何も言えない自分達がいた」などの意見があった。

ことぶき大学校生側からは、

「学生さん達も事前勉強ができていて、とても交換の持てる学生さん達であった。学生さんの手際が良かった。交流自体が楽しかった。時間が足りなかった。情報伝達の方法にのみ時間がかかり、段取りよくできなかったのが残念、生徒さん達はおとなしかった」交流自体は好印象であったが、参加人数にバランスを欠くことの指摘、時間の延長を望む意見が多かった。

3-3 千葉県視覚障害者福祉協会ボウリング大会にボランティアとして参加

1) 千葉県視覚障害者福祉協会（以下、千視協）ボウリング大会概要

千視協では年間を通し、県内在住の視覚障害のある方に対してさまざまな行事と支援を行っている。その中から毎年行われているボウリング大会に本学1年生がボランティアとして参加した。内容はJR稲毛駅改札集合し、そこからボウリング場までの誘導、レーン内での投球の誘導であった。本学学生は15名、視覚障害のある方26名、引率教職員3名が参加した。

2) 事前準備

殆どの学生が同行支援は初めてであるため、あらかじめ同行援護の演習を授業の中で行なった。白杖を持ち、目隠しをし、ペアになって同行援護の体験をした。その上でボランティアに臨んだ。

3) 当日の様子

8月5日当日は千視協の集合時間より30分以上前に集合し、道路・建物の誘導の予行演習をした。段差や信号を渡る箇所、ドアの開き方などチェックした。

視覚障害のある方は普段から同行援護を受けているボランティアに付き添われて、集合したが、集合場所からボウリング場へは学生が同行援護を行った。ボウリング場ではそれぞれ担当の視覚障害のある方にボウル投球の誘導を行った。担当については



写真2 駅から同行支援している様子

参加視覚障害のある方の見え方を熟知している千視協職員が配置した。見え方によっては誘導の必要のない視覚障害のある方もいた。見え方によってレーンのガーターにガードのつく方、つかない方がいた。学生たちはその一投一投を誘導した。担当の方には大きな声援を送っていた。ボウリング終了後は表彰式が行われ、終始和やかなムードであった。



写真3 ボウリング場レーンでの誘導の様子

4) 学生の学び

学生の自由記述アンケートからはボランティア前は「不安だった」「心配だった」「緊張した」などの記述がある学生が15人中7人いた。自由記述だったので、それらの言葉を記述していない学生の中でも同様の感情があった事は考えられる。

また「担当の視覚障害のある方とよくコミュニケーションが取れた」に類する記述は15人中9人いた。普段コミュニケーションが苦手な学生もその記

述があった事から視覚障害のある方の側の配慮によるところが大きい。また、その中には「ボウリングをしていくうちにどんどんいろいろな話をしてくれるようになり、とても楽しく勉強になりました。」などゲーム以外のコミュニケーションについての記述も8人あった。感想の中に「楽しかった」「嬉しかった」「よい経験だった」の記述は12人あった。「介助の方法や形などが人それぞれに違ったので、個性が強く、より技術的なものや経験などが足りないと思いました」と視覚障害のある方の見え方について個性をつかみ取っている学生もいた。一方、担当の視覚障害のある方からの感想では「ボランティアがよかった」「楽しかった」などの評価が15人中14人にあった。千視協スタッフからは「普段はいつも同じ同行援護者なので、学生さんとふれあう機会は貴重でした」という話が出た。

これらの事から、実際に体験的に障害のある方とふれあう事が学生にとって有効であると言える。特にボウリング大会というレクリエーション行事だったので障害のある方にとっても、学生にとっても「楽しめる」内容であったので、双方の経験として有意義であったと言える。

3-4 10／7ワークホームまつり

1) ワークホームの概要

ワークホームは、昭和61年千葉市の独自の事業として、在宅ですごしている障害のある方が軽作業を通じて自立への意欲、社会参加を目指していくことを目的として誕生した。

ワークホームは、市内に居住する15歳以上の心身障害のある方と運営者が5名以上集まればスタートできたが、現在は新たに開所できない。

この制度がスタートした時には、障害のある方々が地域で家庭的な雰囲気のもと日中を過ごす、居場所としての活動が主な目的だったが、現在は、ほとんどのワークホームが作業を活動の中心にしながら、利用者の障害の程度や興味に合わせた様々な文化活動やレクリエーション活動を行っている。

ワークホーム制度が発足して30年がたち、現在市内には15カ所のワークホームがある。

2) ワークホームまつりの概要

ワークホームまつりは、各ワークホームに通所している障害のある方（知的・肢体不自由・視覚・聴覚）やその家族、職員やボランティア等の交流や親睦を図るため、またワークホームについて市民の理解を深める目的で行われている。各施設で作業し、作成した製品の展示販売や1年間練習したコーラス・手品・体操などを披露する場でもある。

ワークホームまつりが始まった当初は、ワークホームの数が今の倍以上あった。しかし閉所や法人化への移行に伴い参加団体や参加人数も減少したことで、会場も千葉ポートアリーナから千葉市ハーモニープラザに移行した。平成10年から開催され、今年で20回目を迎えた。

3) ワークホームまつりに参加するための事前準備

ワークホームまつりに参加するにあたり、千葉市中心身障がい者ワークホーム等連絡会会長が障害者理解を深めてほしいと事前のオリエンテーション時に来校して下さった。ワークホームとは、どのような場所か、いつ設置されたのか、またどのような障害のある方がいるのか等の概要や障害のある子の親としての体験談等を含めて約40分間学生に話をして下さった。

主催者の実行委員長からは、事前に参加団体と演目などの連絡があったので、委員長と相談し、学生を各ワークホームに1～2名配置した。そこでの学生の役割は、障害のある方たちと会話し一緒に活動をして楽しむ。指導員に確認しながらトイレ誘導や身の回りの介助をする。一緒に昼食をとる。各ワークホームの方たちが出演する時は、舞台裏や座席に戻るまでを誘導し、できる範囲で一緒に出演することだった。

4) ワークホームまつり当日の様子

平成29年10月7日は、ワークホームまつり開催20回の節目であり、参加人数も約250名と多く、そこに本学の地域介護福祉専攻1年生15名と教員3名が参加した。

学生は9時に集合し、他のボランティアと共に会場内の配置や各ワークホームの場所を確認した。9時半開場となり、関係者や各ワークホームの方たち・家族を出迎え10時に開会式となった。午前中



写真4 聴覚障害者のための手話通訳・要約筆記の様子



写真5 参加者全員でラジオ体操をしている様子

は、千葉市障害者福祉関係者の挨拶やバンド演奏を楽しんだ。

昼食は、担当のワークホームの方たちと一緒にシートに座り、同じ食事をとった。笑顔で写真を撮っている風景も見られた。

13時半からは5団体のワークホームの方たちが舞台上で歌や踊りを披露した。

各ワークホームの演目は、本格的に指導をうけたフラダンス、聴覚・視覚障害のある方たちでコーラス、個人で手品、知的障害・肢体不自由の方の体操や踊りだった。一緒に踊りに参加した学生たちは、直前の数分の打ち合わせで、見よう見まねで踊り、小道具の操作をまかされた学生は、間違わないようにと真剣な顔つきで操作をしていた。各ワークホームの方たちの中に、初めはなかなか入っていけない様子だったが、時間がたつにつれて会話し、学生に笑顔もみられるようになった。合間に全員参加の盆

踊りやラジオ体操・タオル体操があり、担当のワークホームの方たちと中央にでて一緒に踊りを楽しんだ。15時に閉会式を行いその後片付けして16時に解散となった。

5) 学生の学び

聴覚障害の方と言っても、聞こえ方は人それぞれで、音に過敏に反応する方がいた。場内に流れている音楽の音量につらい人がいるということがわかり、音量をさげてほしいと教員に訴えにきた学生がいた。また会話の方法として手話は一般的に知られているが、OHP（オーバー・ヘッド・プロジェクター）に映し出されている文字が要約筆記だということを知った。要約筆記とは、聴覚障害のある方への情報保障手段の一つで、話されている内容を要約し、文字として伝えることをいう。OHPの隣には略語表が貼ってあり、できるだけ話に遅れないよう略語・略号などを使用するということもわかった。聴覚障害のある方は、どこに障害があるかは見た目では判断ができない。会話して初めて障害を理解した。言葉は、手話はできなくても身ぶりや顔の表情で伝わり、非言語的コミュニケーションでも伝わるということがわかった。

視覚障害のある方とのかかわりでは、床にあった障害物をさけて舞台裏まで誘導した。慣れない環境での移動は、危険がないように物の配置に注意し、安全・安心できる環境作りをしなければならないことがわかった。

交通事故で言語障害になった方やダウン症の方と接して、一人だと弱くめげてしまいそうな生活だが、ワークホームに集い、皆と心や障害を分かち合う事が出来、障がい＝不幸・大変ではなく、障害に負ける心が不幸だと教えられた。

核家族化がすすみ、地域にどのような方が住んでいるのかわからない中、多くの障害のある方が地域に暮らしているという事がわかった。障害のある方にはできるだけ手を貸すべきだと考えていたが、障害を把握した上で、その方が困っていることに対応し、その方の生活を何より尊重することが大切だという感想があった。

しかし、積極的にかかわれる学生がいる一方で、自ら話しかけることができず、障害のある方々の輪

の中にいるにもかかわらず、ただ黙って催し物をみているだけの学生もいた。教員はそのような学生に対して、一緒に楽しみながら踊りや体操を行うように働きかけ、踊りの輪の中に入った。

3-5 避難所運営ゲーム (HUG) の実施

HUGとは、Hinanzyo (避難所)、Unei (運営)、Game (ゲーム) の頭文字を取ったもので、避難所運営を皆で考えるための防災ゲームとして平成19年に静岡県が開発した。避難者の年齢や性別、国籍やそれぞれが抱える事情が書かれたカードを、避難所の体育館や教室に見立てた平面図にどれだけ適切に配置できるか、また避難所で起こる様々な出来事についてどう対応していくかを模擬体験するゲームである。

本学では平成25年度から地域介護福祉専攻の学生にHUGを実施してきた。昨年度は、本学が千葉県生涯大学校の指定管理者となったことから、千葉県生涯大学校の学生と本学学生によるコラボレーション授業としてHUGを行った。

今年度も引き続き千葉県生涯大学校京葉学園の地域活動専攻科学生19名と本学地域介護福祉専攻1年生13名の計32名により、11月1日にHUGを行った。今回は各班(5班編制)に配置された本学教員がカードを読み上げ、班ごとに検討・処理する形式で実施した。カード処理(約180枚)に要する時間には、班ごとにバラツキが見られたが、世代を異にする班員同士の協力と意欲的な意見交換により集中した取り組みとなった。



写真6 世代間交流により避難者対応を協議

本学の学生からは、「避難所の運営がこんなに難

しいとは思いませんでした」とする感想が多く寄せられた。その難しさは、「価値観の違う人が集まっている中で考えを共有して決めていく」とことや限られた時間内に「様々な事情を抱えて避難所に来る避難者をどのように配置し対応するのか」といった判断の迷いと重さを実感したことにある。また、避難所を運営していく上で、「情報の共有を図ることは必要不可欠で、迅速な対応が何より大切だ」、「研修でさえ困惑し、まとめ役が必要であることが分かった」、「災害時には時間がないので、事前にシュミレーションして色々な方の配置を考えることが大事だ」等、基本的な心構えやリーダーの必要性、事前対策の重要性にも気付くことが出来た。さらに、当日の講師による指導を通して、初めに避難所ありきでなく可能であれば自宅避難の選択も考慮すること、避難所における排泄物の処理の大変さや盲導犬を含むペット動物の取扱い等について、新たな知見を得ることもできた。

今回のHUGは、主として一般市民を対象とした一次避難所における運営の困難さと役割の重要性を体験することを意図しており、所期の目的はほぼ達成されたと言える。さらに学生の専門性を高める観点からは、二次的避難所とされる福祉避難所の運営訓練等により、要配慮者に対する支援の経験値を高めていく必要がある。次年度、本学で予定している「拠点福祉避難所」の開設・運営訓練(10月末)を、その機会として役立てていく予定である。



写真7 様々な出来事への対応結果を示す平面図

3-6 11 / 11認知症カフェ

緑栄祭の初日に、地域介護福祉専攻1年生と「認

知症カフェ」を行った。

認知症カフェは認知症の人やその家族が地域の住民や医療・介護の専門家と交流する場である。本学では、会場にワークホーム祭り、ワークホームの避難訓練当時の様子を示したパネルを飾った。また認知症予防として、運動機器を設置した。学生考案の指定運動回数を超えることができたなら景品贈呈と100人限定のコーヒーサービスが効を奏して入場者は多かった。ワークホームで出会った利用者の方もみえて、学生と写真をみながら訓練当時を振り返る姿があった。

肝心の認知症関係の相談は4件であった。認知症ケア上級専門士2名が対応した。

4件共に、家族からのものであり、内容はBPSDの対応、認知症の知識そして認知症予防であった。

カフェ自体の運営は学生が行ったが、認知症の相談、来場者とのコミュニケーションには躊躇する姿がみられた。聴覚障害の方と教員が手話で対応している姿に感銘し、コミュニケーション手段獲得に意欲が高まったとアンケートに記載した学生がいた。今後は会場設定だけでなく、学生も専門士とともに相談場面に立ち会えるような状況を作る必要がある。

4. 学生の学び（まとめ）

障害のある方と実際に関わることができた体験は、「ワークホームの避難訓練（以下、避難訓練）」、「視覚障害のある方とのボウリング大会（以下、ボウリング大会）」、「ワークホーム祭り」である。

これらのうち、「ボウリング大会」と「ワークホーム祭り」は1年生が体験、「避難訓練」は2年生が体験をしている。

障害のある方と関わる機会がまだ少ないと思われる1年生にとっては、当初不安や心配という気持ちがあったようだが、参加体験した内容がボウリングやお祭りといったレクリエーション的な活動であったこともあり、楽しく体験、活動をすることができた様子であった。そのような楽しい雰囲気の中で、障害のある方と実際に関わることを通じて、障害のある方の様子や気持ちを知る機会になったと思われる。

また、2年生においては、ワークホームの避難訓練を通して障害のある方と直接的にかかわり、障害

のある方一人ひとり個別性のある生の声を聞く機会となっていた。机上の障害の理解ではなく、障害のある方が地域で生活している中で災害が起きた時にどのようなことに困るのかを、より具体的、より現実的に理解し、実生活に即しながら障害を理解することになったように思われる。

これらの機会については、障害のある方とかわることを不得意とする学生がいることも踏まえながら、今後必要なことと思われる。

ことぶき大学校交流授業やHUG研修については、障害のある方と直接かわる内容ではない。災害をテーマに、世代の異なる人とのグループワークを通じて、人間関係力の育成や避難所運営について学ぶ機会となっている。異世代の人とのグループワークは、新しい見方や考え方の気づきにつながっているようである。

HUG研修では、避難所運営という机上のシミュレーションを通して、災害時に避難所ではどのような事態が起こるのか、さまざまな事情を抱えた人が避難してくること、その中には要配慮者といわれる避難者がいることを知る機会となっている。机上とはいえ、将来、福祉の専門職である介護福祉士になる学生にとってこのような事態を想定した訓練をすることの意義は大きいと思われる。

5. 新たにあげられた課題

本研究は、はじめに述べているように、平成24年度文部科学省の「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」で助成を受け、取り組んだ「産学協働による学生の社会的・職業的自立を促す教育開発」の継続研究になる。今までの研究活動を振り返り次の4課題が挙げられた。

災害と緊急時の専門力・人間力の育成をするために策定したのが下記のカリキュラムイメージであった。（図1）

1：策定から4年となるが、見直しを行い、カリキュラムを現状に合ったものにしていかなければならない。

また、今年は全学的な拠点の福祉避難所運営訓練を予定している。

2 回行った避難所運営訓練により

①支援者側の学生の要配慮者に対する対応の未熟さ

目標1. 建学の精神に則り、災害や緊急時に主体的に行動できる人材に 目標2. 本学の取り組みが地域貢献につながるように



ステージ	ねらい	内容	継続/新規	備考等
 ステージ3 専門力の育成	身につけた知識や技能を生かし、 災害弱者への支援を行う	体系的なカリキュラムの完成と報告書作成	新規	取り組み全体を整理・組織化する。報告書は総括として。
		ボランティア・コーディネーター等資格取得	新規	「防災サークル(仮称)」を中心に
		防災マニュアルの作成	新規	福祉・教育の観点から作成
		ゴールラインでの意識調査(評価)	新規	
ステージ2 知識・技能の習得	職場や地域の安全を守る	福祉避難所設置に向けたシュミレーション(HUG)	継続	
		防災士等による実技や訓練の実施	新規	
	自分自身や家族の安全を守る	救命救急の受講	継続	毎年、全員受講
		講義「災害と緊急時の介護」	継続	地域介護福祉専攻の必修科目
ステージ1 意識を高める	被災者の状況・立場に思いを寄 せる。	被災者の立場からの講演・シンポ等の開催	継続	
		学生による防災・減災活動のサークル化による諸活	新規	「防災サークル(仮称)」を立ち上げ、学生主体の取り組みに
		ボランティアの推奨・支援	継続	費用助成制度あり
	災害を肌身で感じる。 自身に起こりえることと捉える。	学園祭での防災・減災関連の展示発表	継続	
		自治体等のボランティアの登録・連携	新規	千葉県災害時ボランティア登録等
		スタートラインの意識調査と今後の手立ての検討	新規	全学生対象。年度末に再度実施して、成果等を検証。
				
ワーキンググループの取組		被災者や災害弱者の支援に関する資料の収集、地域との関係作り(地域ケア会議への参加等)、他大学の教育カリキュラム研究、災害弱者支援に関する先駆的地域の視察、千葉県内防災・減災状況の調査、関係する講演・シンポジウム・研修会等への参加、本学の取り組みの企画・立案 等々		

図1 本学における災害・緊急時の専門力・人間力育成イメージ

2：今年度は、障害者団体が行う行事に参加して交流し、理解を深めたが、学生の学びからも、要配慮者との交流の機会を継続して設ける必要がある。

②避難所での時間の過ごし方についての検討不足

3：避難所生活は早期に解消され、できるだけ早く自らの生活を取り戻すことが肝要とされるが、その生活再建に向けて福祉職の関わりはどうあればよいのか。長期的観点にそった要配慮者への支援を模索する必要がある。

前回までは、参加学生が地域介護福祉専攻のみであった。福祉避難所の指定を受けた本学においては、全学的な意識に変わらなければならない。

4：より具体的な福祉避難所としての全学的な運営マニュアル作成が必要となる。

6. おわりに

福祉避難所運営訓練を一時お休みし、障害のある方の理解・支援を体験的に学ぶ教育内容を取り入れることで、学生・教員共に地域で生活している災害時要配慮者の様子を理解した年であった。

また、船橋市介護支援専門員協議会研修委員と検討した研修会は、平時も災害時も多職種協働によって救命が図れるということを実感した学びの機会であった。

回を重ねる度に、課題が明らかになる。文字通り、「災害・緊急時の専門力・人間力の育成」がより明確になり、その育成方法開発につながるように努力したい。

なお、本研究は植草学園短期大学共同研究の助成を得て行われた。

参考文献

- 1) 産業界GP推進実行委員会(2015)「産学協働による学生の社会的・職業的自立を促す教育開発」報告書
- 2) 布施千草ほか(2013)「産業界のニーズに応じた教育改善・充実体制整備事業—産学協働による学生の社会的・職業的自立を促す教育開発—」, 植草学園短期大学紀要第14号, 1-11
- 3) 布施千草ほか(2014)「本学における防災・減災教育の取り組み(その2)—災害・緊急時の専門力・人間力育成—」, 植草学園短期大学紀要第15号, 1-4
- 4) 布施千草ほか(2015)「本学における防災・減災教育

- の取り組み（その3）―災害・緊急時の専門力・人間力育成―」，植草学園短期大学紀要第16号，9-14
- 5) 高倉誠一ほか（2016）「本学における防災・減災教育の取り組み（その4）―災害・緊急時の専門力・人間力の育成―」植草学園短期大学紀要第17号，11-18
- 6) 清宮宏臣ほか（2017）「本学における防災・減災教育の取り組み（その5）―災害・緊急時の専門力・人間力の育成―」植草学園短期大学紀要第18号，17-28
- 7) 千葉市・植草学園短期大学（2016）「平成27年度千葉市・大学等共同研究事業報告書 災害時の障害者等への支援に向けた人材の育成―千葉市における福祉避難所の運営に関する実践的な検証を経た、大学・行政の双方における、持続可能な人材育成に関する研究―」
- 8) 静岡県公式ホームページ
- 9) 千葉県生涯大学校ホームページ

注釈

- 1) 例年実施している避難訓練では、ワークホーム「デフ」の聴覚障害のある方が自らも避難行動をとりながら、他のワークホームまで行き、他の障害のある方を避難誘導するという形をとっている。聴覚障害の場合、耳は聞こえないものの、それ以外の身体や知的機能やしっかりとしていることもあり、震災等万が一の時は、知的障害や身体障害のある方を助けに行くという考えに基づいている。
- 2) ワークホーム建物内の誘導については、指導員などの職員が実施する。ワークホーム内は狭く、学生が中に入って誘導するだけのスペースがないため。
- 3) 専攻科生は、昨年度の拠点福祉避難所運営訓練は体験していない。
- 4) 参加者数は、ワークホームの担当者から聞いた大凡の人数である。訓練の途中で抜けたり、途中から参加した方もいる。